

中国・北魏期仏教石窟寺院の復元的研究と 図像プログラム読解を目的とした米国所蔵作品の調査研究

安藤 房枝

美学美術史学専門 後期課程 1年

はじめに

本調査は、「中国・北魏期仏教石窟寺院の復元的研究と図像プログラム読解を目的とした米国所蔵作品の調査研究」というテーマのもと、平成19年3月25日から3月31にかけて行われた。

本調査の目的は、アメリカ合衆国の美術館・博物館に多く所蔵される中国文物、主に仏教彫刻について、現地での綿密な調査を行い、中国仏教彫刻史の大きな流れの中で各作品を捉え直すことである。特に、中国の仏教石窟寺院から切り取られた彫刻、浮彫作品については、各作品を部分としてではなく、石窟寺院を構成する一要素として復元的考察を行うことで、仏教石窟寺院にあらわれた図像構成の総合的な研究を進める一助とすることを目指した。

図像面では、筆者の研究テーマである「交脚菩薩像」の図像に着目し、これまでに調査してきた石窟寺院に見られる作例に加え、米国所蔵の単独作例を収集することで、「交脚菩薩像」に関する図像学的研究をより充実したものとすることを目指した。

調査日誌

- 3月25日(日)
移動日 (名古屋→デトロイト→シカゴ)
- 3月26日(月)
フィールド自然史博物館 (シカゴ)
収蔵庫内の作品の調査および写真撮影。
調査対象作品の記録をライブラリーにて閲覧。
移動 (シカゴ→デトロイト→ワシントン DC)
- 3月27日(火)
フリアギャラリー
収蔵庫内の作品の調査および写真撮影。
- 3月28日(水)
フリアギャラリー・サックラーギャラリー
展示室の作品の調査および写真撮影。
移動 (ワシントン DC→ニューヨーク)
- 3月29日(木)
メトロポリタンミュージアム・アジアソサエティ
展示室の作品の調査および写真撮影。
(注・撮影はメトロポリタンミュージアムのみ)
- 3月30日(金)
移動日 (ニューヨーク→デトロイト→名古屋)
- 3月31日(土) 名古屋着

調査作例一覧

No.	作品名	年代	銘文	所蔵
01	交脚菩薩像	神龜2年(519)	有	フィールド自然史博物館
02	如来三尊像	北魏	有	同上
03	邑義造像碑	北魏?	有	同上
04	四面像	北齊?	無	フリアギャラリー
05	交脚弥勒菩薩坐像造像碑	南朝陳?	無	同上
06	如来三尊像(光背裏仏伝図の線刻あり)	永熙3年(534)	有	同上
07	如来三尊像(光背裏に如来坐像の線刻あり)	北魏	有	同上
08	維摩像(龍門石窟賓陽中洞将来)	北魏	無	同上
09	阿弥陀浄土図浮彫	北齊	無	同上
10	釈迦說法図浮彫	北齊	無	同上
11	如来立像(体部に世界図を表す)	北齊	無	同上
12	石棺床	北魏	無	同上
13	金銅仏坐像	元嘉28年(451)	有	同上

No.	作品名	年代	銘文	所蔵
14	金銅仏坐像	北魏	?	同上
15	二仏並坐像	北魏 (503)	有	同上
16	半跏思惟像	北齊	?	同上
17	金銅觀音菩薩立像	北魏	?	同上
18	金銅觀音菩薩立像	北魏	有	同上
19	造像碑	北魏	有	サックラーギャラリー
20	礼拝図 (龍門石窟賓陽中洞将来)	北魏	無	メトロポリタンミュージアム
21	趙氏一族如来立像	太和13年, 19年 (489, 495)	有	同上
22	金銅仏立像一具	正光5年 (524)	有	同上
23	四面塔	北齊	有	同上
24	造像碑 (維摩・文殊)	6世紀	有	同上
25	造像碑	北魏 (528)	有	同上
26	交脚菩薩像 (雲岡石窟将来)	北魏	無	同上
27	交脚菩薩像 (雲岡石窟将来)	北魏	無	同上
28	觀音菩薩像頭部 (龍門石窟将来)	北魏	無	同上
29	菩薩像頭部 (雲岡石窟将来)	北魏	無	同上
30	菩薩像頭部	6世紀	無	同上
31	菩薩立像	北齊	無	同上
32	羅漢 (迦葉) 頭部 (龍門石窟将来)	北齊	無	同上
33	菩薩像頭部	北齊	無	同上
34	如来像頭部	北齊	無	同上
35	菩薩立像	北齊	無	同上
36	如来像頭部	北齊	無	同上
37	金銅如来立像	北魏	無	同上
38	如来三尊像	北魏	無	アジアソサエティ
39	如来立像	北齊	無	同上
40	金銅如来坐像	隋	無	同上
41	如来立像 (天龍山石窟将来か?)	唐	無	同上

調査報告

以下では、調査した作例のうち、特に重要な作品について詳細を報告する。

・神亀二年 (519) 銘交脚菩薩像

フィールド自然史博物館所蔵

(形状)

交脚菩薩像の左右に脇侍菩薩を各1体表す。交脚菩薩像は、方形台座上に右足を外にして交脚坐する。三面宝冠、胸飾をつける。右手は屈臂し施無畏印を表す。左手は与願印を表したか? 現状は指先欠損。天衣をX字状につけ、天衣の両端を両肘にそれぞれかける。左右肩から垂飾を垂らす。下半身には裙をまとい、裙を左右に垂らす。

交脚菩薩像の坐す台座の両側面後方より蓮茎がのびその先に蓮花座が表される。蓮花座上に菩薩立像1体表す。両菩薩ともに中尊側の手は屈臂し、胸前で持物をとる。外側の手は体側で衣端をとる。

光背は舟型だったと思われるが上端を欠損。光背の背面には樹木および思惟菩薩像を表す。菩薩は頭光をつけ、半跏坐し、踏み下げた足の下に蓮花座を表す。その後ろに供養者2体、上方に飛天2体表す。

(所見)

交脚菩薩像の光背背面に半跏思惟像を表す作例は、北魏時代の石彫像、金銅像に多く見られる。銘文中の尊名を記した部分は現在判読できないが、交脚菩薩像の尊格は雲岡石窟に例が見られるように、弥勒であると考えられる。銘文中には浄土に生まれることを願う願文が見られる。

・交脚弥勒菩薩坐像造像碑 フリアギャラリー所蔵 (形状)

交脚菩薩像の左右に二比丘、二螺髻像、二菩薩立像を表す。

交脚菩薩像は、方形台座の上に右足を外に交脚坐する。両足の下にそれぞれ蓮花座を表す。右手は屈臂し

胸前で施無畏印を表す。左手は屈臂して与願印を表す。宝冠、胸飾、肩に垂飾をつける。天衣は頭の後ろを通り両肘にかけて垂下させる。条帛をつける。

交脚菩薩像の方形台座から左右2本ずつ蓮茎がのび、その先にそれぞれ蓮花座を設け、その上に二比丘、二螺髻像を表す。

右比丘は若年相、袈裟をまと。両手は衣の中に隠れる。左比丘は老相、袈裟をまと。両手は衣の中に隠れる。左右螺髻像は袈裟をまと。右像は右手屈臂し胸前に伏せ、左手は腹前に伏せる。左像は、胸前で合掌。左右菩薩像は二童子像が支える蓮花座に立つ。二像ともに宝冠、胸飾、肩から垂飾、裙を身につける。右像はX字状天衣をつける。左手はやや屈臂して腰辺で水瓶を第4指と第5指の間に挟んで持つ。左手屈臂して胸前で蓮蕾をとる。左像は天衣を頭の後ろを通し両肘にかけて垂下させる。右手屈臂し、胸前で蓮花、左手腰辺で環状持物をとる。裙の上端を腰で折りかえす。

交脚菩薩像の台座下方には、一对の童子像を左右に各1体表す。右像は鬘髻を捧げ持ち、左像は持物（小鳥？）を捧げ持つ。

左右脇侍菩薩像の下方には、右側に文殊坐像を、左側に維摩坐像を表す。

交脚菩薩像の上方には二仏並坐像、更に上方に灌水の場面の釈迦太子像と九龍を表す。

光背裏には線刻で如来立像が表され、その体部には世界図が表される。

(所見)

北魏期石窟造像においては、一对のバラモン像（一方は鬘髻を、もう一方は小鳥を持つ）や、維摩像と文殊菩薩像の一对形式などの図像が、しばしば好んで左右対称の位置に配された。本像においてもその一对形式が多く取り入れられており、石窟造像との密接な関係が読み取れる。

また、北魏期の多くの交脚菩薩像の単独像は、光背背面に半跏思惟像を表す例が多く、上記のフィールド自然史博物館の作例もその一例であるが、本作例のように、体に世界図を表す如来立像を表す作例は極めて珍しい。

・阿弥陀浄土図
フリアギャラリー所蔵
(形状)

中心に阿弥陀如来を表す。右手は屈臂して施無畏印を表し、左手は腹前に置く。頭上に天蓋を表す。その左右に、宝冠に化仏を表す勢至菩薩像と、水瓶を持つ

観音菩薩像を表す。阿弥陀如来の前方には蓮池を表し、その中には蓮花化生を表す。左右には楼閣を表す。

(所見)

本作例は、現在フリアギャラリーの所蔵であるが、本来は、中国河北省邯鄲市南響堂山石窟第2窟の窟内門上に表されていた。このような大構図の浮彫図の先駆けとしては、河南省洛陽近郊の鴻慶寺石窟第1窟の西壁上方の、西方浄土を表現したと思われる蓮池、蓮花などを表した浮彫が挙げられる。

・四面像
フリアギャラリー所蔵
(形状)

ストゥーパを模した方形塔の四面に各1龕を設け、各龕に一体ずつ仏像を表す。銘文なし。4体のうち1体は交脚菩薩像、その上に左足を外に交脚坐する。右手は施無畏印、左手は与願印を表す。宝冠を被り、胸飾をつける。天衣をX字状にかける。下半身に裙をまと。面部は摩滅。交脚菩薩像を表した面の、反対の面には、漢民族式服制の如来坐像が表される。龕内に結跏趺坐し、右手は施無畏印、左手は与願印か？ 他の二面にはともに西方式服制の如来坐像を表す。ともに腹前で印を結ぶようであるが、両手部は衣の端で隠れている。

(所見)

四面に異なる尊像を表した作例は、フランス・ギメ美術館の石造仏塔や西安碑林博物館の四面像などが挙げられる。本作例のような四面像は、石窟寺院内部に設けられた中心柱の四面の構成とも関連がある。4体の像のうち交脚菩薩像の尊格は、弥勒であると考えられるが、他の3体の如来像については不明である。

・四面塔
メトロポリタンミュージアム所蔵
(形状)

中央に中心柱が置かれ、現状はそのうち三面に如来像各1体が配される。1体は如来倚坐像、2体は如来坐像である。柱の周囲には現状で三壁が置かれ、それぞれの壁面には円拱形の門口が開かれ、その左右に一对の力士像または守門神像が表される。内側の壁面には千仏龕が一面に設けられ、龕横に供養者銘がそれぞれ表される。

(所見)

本来は四面に一仏が表されており、四仏を一組として表したものであったと思われる。如来倚坐像の尊格については今後の課題としたい。

・永熙三年銘如来三尊像

(形状)

中尊如来立像は頭部に頭髪紋様を表す。右手は屈臂して施無畏印を表す。左手は与願印。漢民族式服制。如来立像の左右には、童子に支えられた蓮花座を各1表し、その上に脇侍菩薩像を各1体表す。光背の表面には線刻で紋様を表す。如来立像と左右脇侍菩薩立像の間には、比丘立像各1体をそれぞれ表す。

背面に仏伝と布施太子本生を線刻で表す。各場面には短冊形の中に題記が記されている。現在確認できる場面は、仏伝では托胎、誕生、行七歩等である。布施太子本生では白象の布施、男女の子を布施する場面等である。

背面の下方には銘文が記される。

(所見)

龍門石窟古陽洞内に表される仏伝説話図と共通したモチーフが見受けられる。また、布施太子本生も、龍門石窟賓陽中洞に同様の説話が見られる。北魏洛陽遷都以降の石窟造像との強い繋がりが見いだせる作品である。

おわりに

本調査では、北魏時代の石窟寺院において「弥勒」として非常に流行した交脚菩薩像について、在米の貴重な作例を確認できた。個々の図像要素はこれから検討する必要があるが、特に今回調査した作例では、光

背裏に表された図像が特徴的であった。石窟造像には見られないこれらの要素に関しても今後考察を深めていきたい。

北魏期の単独像のうち、説話図の表現や、一对形式のモチーフの中には石窟造像と密接な関係を持つ物が多く確認できた。出自のはっきりしない単独像についても、石窟造像との比較により、年代や地域などの位置づけがある程度可能になることが期待される。

また、龍門石窟賓陽中洞、響堂山石窟より将来された作品を調査することができた。これらの断片的作品については、石窟全体の構成を踏まえた考察を今後行っていく予定である。

(付記)

フィールド自然史博物館での調査においては、コレクション・マネージャーのジョン・ケリー氏のご協力を、フリアギャラリー・サックラーギャラリーでの調査にあたっては、キュレーター・アシスタントの更井貴子氏のご協力をいただきました。また、本調査にあたってハーバード大学のクランストン・E・フミコ氏にご助言、ご協力をいただきました。ここに深謝申し上げます。

参考文献

- 石松日奈子『北魏仏教造像史の研究』ブリュッケ 2005年
曾布川寛、岡田健・編『世界美術大全集 東洋編3 三国・南北朝』小学館 2000年
松原三郎『中国仏教彫刻史論』吉川弘文館 1995年
Osvald Siren. *Chinese Sculpture from the Fifth to Fourteen Century*, London, 1925